学校だより

磨光

令和７年 10 月 30 日(木)
三豊市立本山小学校
No. 17
発行者：中田　祐二

先日の秋祭りで、久しぶりに会った旧友がいました。また、我が子が小学校に通っていたころの保護者仲間とも会いました。もっと先輩の方もいらっしゃいました。
「11 月の閉校記念の会は、おれらも行ってえんかなあ」。もちろん。
「私の時は木造校舎だったから、今の校舎じゃないんだけど……」。でも子どもは通っていたでしょう？
「それで、どんなことをするの？」。別紙を参照してください。

11 月 15 日、本山小学校で「ふるさとの昼べ」を開きます。テーマは「響けチャイムの音 ～本小最後のその日まで～」。閉校まで半年を切った今、在校している子どもたちから、年配の方まで、懐かしい顔が集まった時、鐘の音と共に、きっと魔法が起こります。小学校時代に若返る魔法。何十年ぶりに再会した友と一瞬であの頃に戻れる魔法。まっさらの校舎がまぶたによみがえる魔法――。
教職員一同、懐かしの本山小学校でお迎えします。

小さな思い出を持ち寄って

当時の木造校舎は、廊下のふき掃除をしていると、ささくれだっていて、よくとげが刺さったものでした。教室に大きなストーブがあり、先生が牛乳を温めてくれたことや服を焦がしてしまったこともありました。宿直室には「用務員のおっちゃん」がいて、みんな大好きでした。思い出は、次々と引き出されてきます。
その「用務員のおっちゃん」は、宿直室で犬を飼っていて、たぶんコリーで、名前は「エス」だったと記憶しています。私は昼休みに、みんなの牛乳瓶の底にわずかに余っていた牛乳を集め、エスに届けにいっていたものでした。ペチャペチャと牛乳を舐める音と、エスの横顔を今でも覚えています。
何でもなく小さな、それでも大切な思い出です。

> 「人生を幸福にするためには、日常の瑣事を愛さなければならぬ」とも芥川（※龍之介）は書く。「雲の光、竹のそよぎ、群雀の声、行人の顔、――あらゆる日常の瑣事のうちに無上の甘露味を感じなければならぬ」。とるにたらない些細にこそ、美しいものはある。
> （朝日新聞「天声人語」（2025.10.8）より抜粋）

小学校の出来事を振り返って思い出すのは、小さな事ばかり。そんなことがかけがえなく楽しかった。だから、芥川の言葉を引くまでもなく、小学校時代は、やっぱり幸せだったのだろうなと思うのです。
15 日には、ご来校のみなさんで、甘く懐かしく、小さな幸せを語り合いましょう。

秋祭りが終わっても耳の奥で太鼓の音が響いています。この本山小学校が閉校しても、チャイムの音が心の中に鳴り続けるといい。どこかでチャイムの音色を聞くたびに、小学校のことをおもいだしてくれればいい。響けチャイムの音。本小最後のその日まで。そしてその後も。

今回の学校だより「磨光」は、まちづくり推進隊のご協力を得て、本山地区全戸に配布しております。
また、これまでの学校だよりは、本山小学校ホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。右の二次元コードからもご覧いただけます。
【これまでの学校だよりは、こちらから→】